11　綾歌南部地区でのヒマワリ栽培の取組み

■　ＪＡ香川県綾歌南部花卉部会　■

（中讃農業改良普及センター　井口里香）

●対象の概要

綾歌南部地区では水稲・麦にイチゴやキュウリ、カーネーションなどの施設園芸やブロッコリー、ナバナ、柿などの露地品目、畜産等を取り入れた複合経営がなされている。そうした中で、ＪＡ綾坂地区営農センターでは、柿やブロッコリー、ナバナなどの出荷がない夏季の収入源として導入できる品目はないかと模索し、女性や高齢者でも負担なく栽培に取り組めるヒマワリ（切花）を選定した。地区内の柿部会等で作付推進を行い、平成24年度から６名がヒマワリ栽培に取り組んだ。

●課題を取り上げた理由

ヒマワリは栽培管理が比較的容易で少ない面積から取り組むことができる。また、播種後45～70日の短期間で開花し出荷ができるため、間作作物としても栽培が可能である。さらに、香川県は西日本トップの生産地であり、県においても生産拡大を目指している主要品目の一つである。

一方、当地区においてヒマワリはこれまで馴染みのなかった品目であるうえに、栽培希望者は全員がヒマワリはもとより花き栽培自体が初心者であったため、栽培から出荷までを支援する必要があった。

●普及活動の経過

１　まずは、試験栽培から

ヒマワリには露地栽培とハウスでの促成栽培があるが、初心者ばかりであったことから露地栽培を指導した。最大の需要期は６月第３日曜日の父の日であるが、この作型では播種時期が３月下旬の低温期に当たるため、時期を遅らせて発芽適温期である４、５月播種で開始した。

播種作業をはじめ、フラワーネットの設置など、ＪＡ担当者とともに巡回指導、作業支援を行った。

栽培巡回風景

２　資材の共同購入共同作業で効率化を図る

栽培ほ場に近い生産者３名が２年目から播種、防除、出荷選別の作業を共同で行うこととした。１戸の栽培面積が１ａ、２ａと少面積であるため、肥料や農薬などの資材の購入と管理作業を共同で行うことで作業面、経済面の無駄な部分をなくそうと、ＪＡ、普及センターと相談し、実施した。

３　持込み共選から個別選花へ

１年目は何もかもが初めてのことでもあり、出荷・調整と荷造りはＪＡが支援したが、初期投資がかかり、その上、思うほどの売り上げとならなかったことから支援の経費を支払うとほとんど利益が残らなかった。

荷造り支援を見学

このため２年目は、選別・束作りは生産者が行い、ＪＡには荷造り支援を依頼することで経費の削減を図ることとして、近隣の産地の出荷・調整支援を見学し、束の作り方等の研修を行った。

●普及活動の成果

１　１年目は栽培技術の習得

播種前に全ほ場の土壌分析を行いＥＣ濃度をチェックした。前作にブロッコリーを栽培したほ場が多かったので肥料残りが心配されたが、肥料分はほとんど残っていなかった。

播種後、週１回ＪＡ担当者とともに全ほ場の巡回を行い、発芽後の被覆資材の除去、ネット上げ、病害虫防除等の栽培指導を行い、生産者の技術習得に努めた。

しかし、初年度は全国的に出荷量が多い年であったこと、また台風による茎曲がりや病害が発生したことなどで単価は低迷した。

２　２年目の６月（父の日）出荷は順調に終了

父の日出荷の作型の播種は３月25日頃で、発芽適温（25℃）であれば３～４日で発芽するが、この時期は平均気温が10℃前後と低いため発芽に10日程度を要した。その間、土壌を乾かさないように指導を行った。

また、春の作型は夏の作型と違い、初期の草丈確保が重要になる。特に今年度は、４月中旬から５月中旬までの降水量が西日本で観測史上最少を記録するという少雨状態が続き、ヒマワリの生育には不適な気象条件であった。発芽して１ヵ月を経過しても草丈が20cm前後にとどまったことから、畦間潅水と液肥の潅注等を指導し、出荷時には出荷規格の草丈70cm以上までに生長させることができた。

ＪＡ集荷場に束出荷で持ち込まれたヒマワリ

３　経費の削減で収益アップ

１年目の持込共選から２年目は生産者が個々に選別して10本束にしたものをＪＡに持ち込む方式に変更したことで、支援の経費が１本２円と、１年目の４分の１に削減できた。

また、生産資材も共同購入としたことで、在庫を少なくして経費を削減できた。

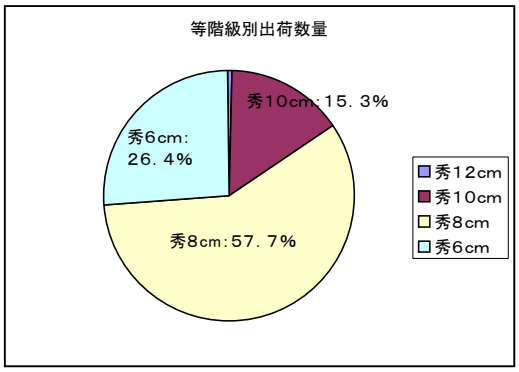
●今後の普及活動の課題

１　出荷時期の拡大

６月出荷の作型は柿の管理作業と重ならないのでヒマワリの栽培に専念できるが、７月以降は摘果作業等が忙しくなる。そのため、８月以降の作型をやめ、単価の高い６月を中心とした出荷時期の拡大を目指す必要がある。また、生産者のほとんどがハウスを持っていないため、ヒマワリ生産が軌道に乗れば施設を導入し、５月の母の日出荷を目指すように誘導していく必要がある。

２　規格10cm級出荷比率の向上

今年度６月の出荷物について等階級別に出荷比率と単価を分析した結果、秀８cm級が57.7%と全体の半数以上を占めていた。しかし、単価では秀10cm級が最も高く、秀８cm級の1.5倍の単価であった。このことから、６月出荷の施肥量、播種間隔を見直し、10cm級の出荷比率を高め、平均単価の向上に努める必要がある。



図－１父の日出荷における等階級別出荷数量

３　生産面積の拡大

ほとんどの生産者が予冷庫を有していないため、栽培面積はその日に収穫、選別できる作業時間で制限される。そのため播種時期を２週間程度ずらして、労働力の中で無理なく出荷できる作型を産地として作成する必要がある。

また、柿、ブロッコリー生産者を対象にさらなる作付推進を行い、新規栽培者による栽培面積の拡大を図る必要がある。